



 Data	2022-78
監督・脚本・編集: 是枝裕和	
出演: ソン・ガンホ / カン・ドンウ オン / ペ・ドゥナ / イ・ジウ ン / イ・ジュヨン	

みどころ

近時の邦画の快進撃は『万引き家族』(18年)から始まった。一貫して“家族”をテーマにしてきた是枝監督は、『パラサイト 半地下の家族』(19年)のソン・ガンホらとコラボし、新たな家族の物語に挑戦!

『ドライブ・マイ・カー』(21年)の後半は北海道へのロードムービーになったが、すべて韓国で撮影した本作は、ソウルから朝鮮半島東海岸を月尾島(仁川)まで、“ベイビー・ブローカー様御一行”が養親探しのため、ワゴン車で進むロードムービーになる。否応なく起きるさまざま“トラブル”も見物だが、注目は終末の大団円?

何が犯罪で、何が正義?それがよくわからないからこそ、弁護士も商売が成り立つことを、本作を見て再確認!

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■是枝監督が家族をテーマに韓国の俳優とスタッフで!■□■

2021年の第74回カンヌ国際映画祭では濱口竜介監督の『ドライブ・マイ・カー』(21年) (『シネマ49』12頁) が脚本賞を受賞したが、近時の邦画の快進撃は2018年の第71回カンヌ国際映画祭で是枝裕和監督の『万引き家族』(18年) (『シネマ42』10頁) がパルムドール賞(最高賞)を受賞したところから始まった。同作はインパクトはあるものの、いかにも品のない(?)タイトルとは裏腹に、亡・樹木希林扮する初枝ばあちゃんを中心にした“疑似家族(万引き家族)”の物語が、是枝監督の素晴らしい手腕によってカンヌの絶賛を獲得した。他方、過去も現在もずっと元気に次々と問題提起作を作り続ける韓国映画界の中心にいる俳優がソン・ガンホ、監督がポン・ジュノだが、その2人が組んでパルムドール賞を受賞した傑作が『パラサイト 半地下の家族』(19年) (『シネマ46』14頁) だ。

近時の日本は、内向き志向が強くなっているが、還暦を迎えようとしていた是枝監督はそれとは逆に、『万引き家族』の後は、フランスの女優カトリーヌ・ドヌーヴと組んで『真実』（19年）（『シネマ46』139頁）を監督する等、海外志向を強めていた。そんな是枝監督が、今回は何と、ソン・ガンホを主演に起用し、韓国の制作スタッフで新たな“家族の物語”に挑戦！すると、そこに『空気人形』（09年）（『シネマ23』225頁）で主演に起用し、第62回カンヌ国際映画祭に挑戦したペ・ドゥナを加えたのは当然だ。

是枝監督は『そして父になる』（13年）（『シネマ31』39頁）では、「6年間育ててきた息子が、他人の子供？そんなバカな！血を優先？それとも時間を優先？」という困難なテーマに挑戦！そして、『万引き家族』では、死亡通知を出さずに親の年金をもらい続けていた家族が逮捕されたという、現実起きた事件をきっかけに、「消えた高齢者」として社会問題化し、年金詐欺を働いた家族がバッシングを受けたことに違和感を覚える中で、年金と万引きで生計を立てている一家の物語に着想した。しかして、本作では新たに、何をテーマに、どんな家族の物語に挑戦を？

■□■今回のテーマは赤ちゃんポスト！それって一体ナニ？■□■

『そして父になる』は“子供の取り違え”というあっと驚くテーマを描いたが、その製作の中で是枝監督は熊本市の病院に設定している「このとりのゆりかご」に関する資料を読み、“赤ちゃんポスト”や“養子縁組”について興味と関心を持ったらしい。

赤ちゃんポストとは、「様々な事情で育てられない赤ちゃんを匿名で預け入れることのできる窓口」のこと。世界ではじめての赤ちゃんポストは、2000年4月にドイツのハンブルクの民間幼稚園の片隅に「Babyklappe」（ベビークラッペ＝赤ちゃんの扉）の名で設置され、数年の間に世界に広まったらしい。日本では2007年5月に熊本慈恵病院に設置された1つだけだが、韓国には3つの赤ちゃんポストがあり、最初のそれは2009年にソウル市内のジュサラン・共同体教会に設置されたようだ。なるほど、なるほど。

本作のパンフレットには、柏木恭典氏（千葉経済大学短期大学部 こども学科 教授）のコラム「韓国・日本における赤ちゃんポストや養子縁組の現状」があるので、本作を鑑賞するについては、それをしっかり勉強したい。

■□■本作に見る赤ちゃんポストにビックリ！■□■

日本の赤ちゃんポストはたった1つだけ熊本慈恵病院に設置されているが、キリスト教信者が多い韓国では、1つ目も2つ目も教会に、3つ目はお寺に設置されているらしい。それを前提として、本作導入部における、釜山家族教会に設置された赤ちゃんポストに、若い女性ミン・ソヨン（イ・ジウン）が赤ちゃんを預け入れるシークエンスに注目！

赤ちゃんポスト設置の目的は前述のとおりだが、世の中には、そんな人の“善意”を利用して金を稼ごうとする“悪い奴”がいるもの。それがベイビー・ブローカーだ。そして、原題を『BROKER』、邦題を『ベイビー・ブローカー』とする本作で、第75回カンヌ国際映画祭主演男優賞を受賞したソン・ガンホ演じるのが、ベイビー・ブローカーのハ・サ

ンヒョン。本作ではまず、サンヒョンが相棒のユン・ドンス（カン・ドンウォン）と共に、ソヨンが職員のいない日曜日の夜に預けていった赤ちゃんを、本業である釜山の街で営む古ぼけたクリーニング店兼自宅に連れて帰るシークエンスにビックリ！ホントにこんな現実があるの？

『万引き家族』では、「万引き家族」なるものの実態（生態）をはじめて教えられたが、さて、本作に見るベイビー・ブローカーの実態（生態）は？サンヒョンとドンスは、この赤ちゃんの養子縁組をどうやって成立させ、いくら稼ぐの？

■□■養父母探しのロードムービーが開始！その追跡者は？■□■

『ドライブ・マイ・カー』の後半は、若い女ドライバーの運転する赤いサブに乗った主人公が北海道に赴くロードムービーになっていた。それと同じように本作も、導入部で赤ちゃんポストの実態が提示された後は、“ある事情”でソヨンも仲間に加わった“ベイビー・ブローカー”たちの、養父母探しのロードムービーになっていく。サンヒョンが商売用に使っているボロボロのワゴン車で釜山を出発した彼らの最初の目的地は、盈徳。しかし、待ち合わせの場所に“商談”にやってきた男女は、ウソンの顔を見て「写真ほど可愛くない」とクレームをつけ、約束の金額を値切ってきたから、アレレ・・・？そこで「お前らなんかに渡すか！」とブチ切れしたソヨンを見たサンヒョンは取引を終わらせ、他の養親候補を探すことにしたが、サンヒョンの妻子を含む“ベイビー・ブローカー一行様”は、とりあえず、ドンスが育った児童養護施設に一晩泊まることに。

他方、そんな彼らをずっと追跡していたのは、女性青少年課の刑事スジン（ペ・ドゥナ）と後輩のイ（イ・ジュヨン）。彼女たちはサンヒョンとドンスをずっと見張っていたが、逮捕するためには取引の現場を押さえなければならないから、そのタイミングが難しい。

■□■ドンスとソヨンはなぜケンカを？捨て子になる理由は？■□■

本作は、冒頭のソヨンによる赤ちゃん預け入れシーンに際して、ソヨンが「必ず迎えに来るからね」という手紙を添えていたことが大きなポイントになる。赤ちゃんポストで赤ちゃんを受け入れる側の人間としては、「そんな勝手なことを言われても・・・」と思うのが当然だが、クリーニング店と共に並んで“ベイビー・ブローカー”をなりわいしているサンヒョンは、過去に同じような経験があるらしい。もっとも、受け入れた翌日、「私が母親だ」と名乗りながらソヨンが登場し、「やっぱり思い直して赤ちゃんを迎えに来た」と言われても・・・。

そんな対応の中で見せる韓国を代表する俳優、ソン・ガンホの演技力はさすが。警察に通報されることを恐れたサンヒョンは、自分たちの裏稼業を打ち明けつつ、一方では、「赤ん坊に温かな家庭を見つけるための善意からだ」と開き直り、他方では、「養子縁組と引き換えに謝礼が出る」とソヨンを説得する姿が興味深い。

ソヨンが“ベイビー・ブローカー様御一行”の1人として、養親探しのロードムービーに旅立ったのは、ソンヒョンのそんな巧みな弁舌に丸め込まれたためだ。ところが、ドン

スが育った児童養護施設で一泊した夜、ドンスがソヨンに対して、子供を捨てる母親への怒りをぶちまけ、ソヨンが赤ちゃんポストに赤ちゃんを預けた時に添えた「必ず迎えに来るからね」という手紙を嘘だと決めつけたから、さあ大変！ドンスは直ちに「事情も知らずに理想の母親像を押しつけるな」と反論し、2人は激しく対立したが、それはなぜ？そんな2人の仲裁でも役に立ったのが、サンヒョンの巧みな弁舌。いらだつドンスに対して、サンヒョンは、「ドンスも同じ手紙とともに母親に捨てられた過去があるのだ」と話し、「辛く当たるのを許してやってくれ」と頼むと・・・なるほど、みんなそれぞれ色々な事情があるわけだ。

“ロードムービー”が面白いのは、さまざまな事件と話し合いを伴う“ロード”の時間と正比例して、ロードムービー参加者たち相互の理解が深まっていくこと。それは、中学高校時代の修学旅行が思春期の生徒たちにとって有意義なのと同じだ。さらに、是枝監督はそんな“ロードムービー”の中であれほどギスギスしていた3人の関係が変化していくことを描く演出がうまいので、それに注目！

■□■中盤からはアレレ？殺人事件を伴うサスペンスに！？■□■

『パラサイト 半地下の家族』は、前半で面白い家族の物語を見せた後、後半からは「半地下の家族」というサブタイトルの意味が明かされていくから、ミステリー色が満ちてきた。そのため、同作はボン・ジュノ監督直々の「ネタバレ厳禁」の「お願い」があった。

本作の是枝監督はそれと同じような「お願い」はしていないが、本作も中盤から“ベイビー・ブローカー御一行様”を追い続ける刑事たちのもとに、刑事科から殺人事件の一報が舞い込んでくるからビックリ！それは、釜山のホテルで男の死体が発見され、その容疑者として指名手配されているのが若い女だというものだ。アレレ、本作は後半からサスペンスに！？

他方、サンヒョンたちはやっと次の養親候補を探し当てて商談に入ったが、今度の怪しげな買い手は相場の2倍の金額を提示してきたからアレレ。サンヒョンたちの養親探しも一筋縄にはいかないようだ。さあ、是枝監督が描く、“新たな家族”の物語の、その後の展開は？

■□■半島の東海岸に沿った旅はハプニング続き！■□■

日本は島国で、四方を海に囲まれているから、海岸沿いの美しい観光地がやたら多い。台湾を旅行すると、台湾も全く同じだということがわかるし、台湾は日本以上の南国だから、海の実しさはある意味で日本以上。とりわけ、台湾の東海岸はそうだ。他方、韓国は半島だから、北は大陸につながっているが、南と東西は海に面している。韓国第二の都市・釜山に旅行すれば、釜山が海に面した美しい都市で、魚介類のおいしい都市だということがよくわかる。

しかして、釜山から月尾島（仁川）に向かうロードムービーたる本作の①釜山、②盈徳、③浦項、④厚浦、⑤蔚珍、⑥江陵に向かうまでのワゴン車による“ベイビー・ブローカー

様御一行”の行く先は半島の東海岸に沿った都市だから、美しい海岸の風景をしっかりと楽しみたい。もちろん、本作では、養親探しの苦労や“ベイビー・ブローカー様御一行”内部のトラブルが次々と起きてくる。それは、①こっそり車に忍び込んでいた児童養護施設の少年ヘジンの登場、②赤ちゃんの発熱による病院への担ぎ込み、③ソヨンによるサンヒョンとドンスへの“ある告白”、等々だが、是枝演出による芸達者な韓国俳優人の軽妙な演技によるそれらの物語をしっかりと楽しみたい。

他方、蔚珍から江陵へは“ベイビー・ブローカー様御一行”に2人の女刑事も加えたドタバタ道中になるが、それは一体ナゼ？

さらに、江陵から月尾島（仁川）の“ベイビー・ブローカー様御一行”の旅は車を乗り捨て、韓国の韓国高速鉄道（KTX）での旅になるが、それは一体ナゼ？そして、ソウルで韓国高速鉄道（KTX）を降りた“ベイビー・ブローカー様御一行”たちは、ホテルで3組目の養子縁組候補ユン夫妻との“商談”に入るが、その成否は？

■□■3度目の商談は？現行犯逮捕は？結末は大団円？■□■

『パラサイト 半地下の家族』に見た家族は本来“犯罪家族”ではなかったが、『万引き家族』に見た家族は、法律上は当然、犯罪家族。それと同じように、本作が描く赤ちゃんポストに預け入れられた赤ちゃんを養子縁組させて金を稼ぐ“ベイビー・ブローカー”を裏稼業とする一家は本来“犯罪家族”だ。それを追跡し、金銭授受の現場を押さえて現行犯逮捕しようとする2人の女刑事の執念も涙ぐましいが、これは当然、正義に基づくものだ。そんな“対決”を含みながら、釜山から月尾島（仁川）に向かうロードムービーの中で、ソウルで迎えた3度目の養親候補との商談にサンヒョンはすべてをかけていたが、その首尾は？

本作導入部でサンヒョンがソヨンに話していた通り、「俺たちの商売は、捨てられた赤ん坊に温かな家族を見つけるための善意からだ」との説明（弁明）もたしかに一理はある。また、旅の途中で、赤ん坊が熱を出した時の慌てぶり、対応ぶりを見れば、いかに商売のためとはいえ、彼らの赤ん坊に対する愛情（愛着）もよくわかる。しかし、是枝監督がそんな家族をテーマとして描いた本作は、きっとサンヒョンたち“ベイビー・ブローカー”の現行犯逮捕で終わるはず。それがずっとスクリーンを見ていた私の予測だったが、案の上・・・？しかし、何が正義で、何が悪かを一義的に定めることは難しい。それは、弁護士生活50年近くになる私が強く実感することだ。

しかして、本作ラストは、現金授受を伴う赤ん坊の人身売買によってサンヒョンたちは現行犯逮捕、そして、裁判で有罪。そんな単純な結末でいいの？いやいや、そんなはずはない。それがわかっているれば、いや、本作の結末大団円（？）に十分留意しつつ、楽しみたい。

2022（令和4）年7月9日記